学歴階層社会の正当性を支える認知基盤としての相補的ステレオタイプ

池上知子

(大阪市立大学大学院文学研究科)

キーワード：相補的ステレオタイプ システム正当化理論 学歴主義

Complementary Stereotype as Legitimizing Ideology for Academic Pedigree Society
Ikegami, Tomoko
(Osaka City University)

Key words: complementary stereotype, system justification theory, academic elitism

システム正当化理論によれば、人々は基本的に既存の社会体制を肯定するよう動機づけられていると考えられる (Jost et al. 2001)。しかし、このような動機は、社会的格差や不平等の容認に繋がるため、平等主義思想と葛藤を起こす。これに対し、Kay et al.(2007)は、相補的ステレオタイプにこのような葛藤を軽減する機能があると論じた。相補的ステレオタイプとは、ある次元（地位関連次元）で優る/劣る集団は、別の次元（地位無関連次元）では劣る/優ると認知する傾向をいうが、これにより平等主義的世界観の維持が可能になるからである。よって、社会の階層化を生み出すシステムの正当性を信じている者ほど、相補的ステレオタイプに依存すると予想される。ただ、相補的ステレオタイプは平等主義的世界観を維持するためにだけ機能しているとは限らない。社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1986) の見地からは、階層化の肯定は、内集団が劣位にあるとき内集団高揚動機と葛藤することが予想される。その場合、内集団への脅威となる上位集団の地位無関連次元での評価を下げることによって葛藤を解消するであろう（下位集団は脅威とならないため内集団高揚動機の影響は少ないと考えられる）。つまり、相補的ステレオタイプは、平等主義的世界観を維持するためだけでなく、社会的アイデンティティの維持高揚のためにも利用されているといえるが、これら異なる動機がどのように複合的に作用しているかは十分検討されていない。

以上より、本研究では、日本的学歴階層社会に注目し、その正当性への信念が、相補的ステレオタイプのもつ2つの機能によりいかにして支えられているかを検討する。

方法

参加者：大学生 191名 (男性 76名 女性 115名)

平均年齢 19.16 歳 (SD=0.84；範囲:18~25歳)

手続き：大学の心理学関連の授業時間の一部を利用し、質問紙実験を集団で実施した。所要時間は 20分程度。

質問項目：

(1) 基本属性 年齢、性別、学年等の回答を求めた。(2) 学歴社会正当性信念 池上 (2004) により作成された学歴主義の合理性を肯定／否定する意見項目への賛否を尋ねた (8項目 $\alpha=.78$)。(3) 内集団同一視 所属大学への自己同一視の程度を測定する項目に回答を求めた (6項目 $\alpha=.74$)

(4) 脅威操作 内集団地位への脅威を操作するため、参加者の所属大学を含む 10 校の大学名を呈示し、それぞれの学力水準を 6 段階で評定させた。高脅威条件では、所属校以外の 9 校のうち 1 校を除く 8 校が所属校より上位の大学となるようにし、低脅威条件では、逆に 8 校が下位の大学となるようにした。参加者をいずれかの条件に約半数ずつ無作為に割り当てた。(5) 上位校と下位校の特性評定 参加者全員に所属校を含む 4 校の大学名を呈示し、それぞれのイメージを 12 の単極性特性形容詞尺度 (6 段階) を用いて評定させた。評定対象の 4 校のうち、所属校以外の 3 校は、所属校より上位の大学 (上位校)、下位の大学 (下位校)、及び同等の大学とした。特性形容詞の半数は能力特性に関連し (地位無関連特性)、残り半数は対人的特性に関連するものであった (地位無関連特性)。いずれもポジティブ項目とネガティブ項目を同数ずつ含め、次元別にポジティブ得点を算出した。

結果と考察

脅威操作の確認：所属校の学力水準評定を脅威条件間で比較したところ、低脅威条件 ($M=4.27 SD=0.66$) に比べ高脅威条件 ($M=3.70 SD=0.67$) は評定値が有意に低く ($t=5.82, p<.001$)、内集団の劣位がより顕現化していたことから、操作は有効であったといえる。

相補性測度の構成：相補的ステレオタイプへの依存度の指標として、地位関連次元と地位無関連次元のポジティブ得点の差を用いた。ただし、上位校の場合には地位関連次元の得点から地位無関連次元の得点を引き、下位校の場合は地位無関連次元から地位関連次元を引くことによって求めた。

重回帰分析：上位校と下位校の相補性得点をそれぞれ目的変数として、学歴社会正当性、所属校への脅威 ($高=+1 低=-1$)、所属校への同一視、これらの 1 次及び 2 次の交互作用項を説明変数とする重回帰分析を実施した。その結果、上位校、下位校いずれの場合もモデルが有意となった (Table 1)。

Table 1 上位校と下位校の認知における相補性に関する重回帰分析の結果

説明変数／従属変数	上位校	下位校
学歴社会正当性	.11	.33***
所属校への脅威	-.03	.05
所属校への同一視	.21**	.14
正当性*脅威	.09	.02
正当性*同一視	.13	.11
脅威*同一視	-.13	.12
正当性*脅威*同一視	.18*	.02
調整された R^2	.07**	.12***

注：数値は標準化偏回帰係数 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

まず、下位校に対しては、他の要因とかかわりなく学歴社会の正当性への信念と相補性との間に正の関係が認められた ($\beta=.33***$)。一方、上位校に対しては、所属校への同一視が強いほど、相補性が強まることが示された ($\beta=.21**$)。また、2 次の交互作用が有意であったことから、下位分析を行ったところ、所属校への同一視が強い者が脅威に直面したとき、学歴社会の正当性への信念と相補性との関係が顕現化することが示され ($\beta=.43*$)、そうでない場合は関係が認められなかった。下位校に対する相補的認知により平等主義的世界観を維持し、上位校に対する相補的認知により内集団高揚動機との葛藤を解消することで、学歴格差に伴う各痛みを緩和し、学歴社会が正当化されていることが推察される。

引用文献

- (1) 池上知子(2004). 愛教大研究報告,53,79-86. (2)Jost et al. (2001). In Jost & Major (Eds), *The psychology of legitimacy*, 363-388. (3) Kay et al. (2007). *AESP*, 39, 305-358. (4)Tajfel & Turner(1986) In Worchel & Austin (Eds), *Psychology of intergroup relations*. 7-24.

付記：本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号 19530560) を受け実施した。本研究は、池上 (2008：日心第 72 回大会) において発表したデータの一部を別の角度から再分析したものである。